

所属・資格 英文学科・教授

申請者氏名 高橋 利明

研究課題		ハーマン・メルヴィル『白鯨』を<食べる>視点から読む
報告の概要	研究目的 および 研究概要	世界文学の最高峰の一つとされるハーマン・メルヴィルの『白鯨』(1851)を<食べる>視点から考察する。この大長編作品の<食べる>光景は、第64章「スタッフの夜食」、第65章「美食としての鯨肉」、そして第66章「鮫の大虐殺」の中に見られる。これらの章の緻密な分析によって、人間が、そして動物が、<食べる>ことの普遍的な意味、即ち、人間及び動物と自然(または神)をめぐる捕食と被食のエコロジカルな関係性を探究する。
	研究の結果	クィークェグたちによる「飽くなき殺戮」(“an incessant murdering”)が引き起こした共食いするサメたちの断末魔は、人類の末路を暗示する。つまり、サメ同士の共食いの無残な姿が、人が人を「食べる」という究極的なタブーの恐怖を我々に喚起させるのである。この地獄絵は凄惨を極めるものだが、作家メルヴィルにとって「食べる」ことの究極的なイメージは、自ら見聞したタイピー族のような南海の島々の「人食い」の風習につながっていたと思われる。しかし、語り手は、「土曜の夜の肉市場に行き、二足動物(人間)の群れが、死んだ四足動物(牛など)の長い列を見上げているのを見よ」(“Go to the meat-market of a Saturday night and see the crowds of live bipeds staring up at the long rows of dead quadrupeds.”)(343-4)と言い、その光景を見て驚愕する人食い人種を想起しながら、「人食い人種? 一体人食いでない人種などいるだろうか?」(“Cannibals? who is not a cannibal?”)(344)という寸言を吐いて、罪の深さにおいて「文明化され啓蒙された食通ども」(“civilized and enlightened gourmand”)(344)と「人食い人種」の立場を反転させているのである。
	研究の考察・反省	鯨の捕食と被食とは、常識的に言えば、人間が鯨を食べ、鯨が人間に食べられることを意味している。あくまでも人間が主体であり、鯨は客体である。しかし、鯨の側から、別言すれば自然の側から見るならば、人間と鯨の主客は、比喩的な反転の契機を内在していることがこの研究によって実証された。今後は、レヴィ=ストロースの「われらみなカニバル」というエッセイに見られる思想を先取りしていたメルヴィルの『白鯨』について、文化人類学的思考を採用することで作品の現代的な意味を深く分析したい。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 研究成果物：喩としての毒——「ラパチーニの娘」における「恐怖の共感」について 『研究紀要』第97号 平成31年2月28日 日本大学文理学部人文科学研究所	
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物：Hawthorne and the Paradox of the Fortunate Fall: Eden Found in <i>The Marble Faun</i> 『研究紀要』第98号 令和元年9月30日 日本大学文理学部人文科学研究所	